

第35回

令和2年度

小泉八雲をよむ

感想文・詩
入賞作品集



文豪小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）は、松江での一年三ヶ月にわたる暮らしのなかで、当時失われつつあった古き良き日本の面影を見出し、美しい文章に載せて全世界に紹介しました。松江市では、「国際文化観光都市・松江」の礎を築いた小泉八雲の顕彰を目的とした様々な事業を行っています。

昭和六十一年から毎年行っている「小泉八雲をよむ」感想文・詩の募集事業も今年で三十五回目となりました。今回は、感想文一二七編、詩五十二編、合計一七九編の力作をお寄せいただきました。

作品集には、応募作品のうち優秀賞、優良賞及び佳作を受賞した十八編の作品を掲載しています。多くの皆様がこの作品集をご覧いただき、小泉八雲を身近に感じる契機としていただきたいと考えています。

結びに、ご応募いただきました皆様をはじめ、この事業にご協力いただきました皆様方に感謝申し上げます。

令和三年三月

主催 松江市

松江
市教育委員会
八雲会

後援 毎日新聞松江支局

BSS山陰放送
小泉八雲記念館

目次

第35回 感想文 入賞者

★小学生の部

〔優秀賞〕

八雲の心にひびいた琵琶の音

東京都武蔵野市 高橋 周……………1

〔優良賞〕

「伝える」ところごと

島根県松江市 野津 七海……………2

怪談の魅力

島根県松江市 岩井 優奈……………3

講評……………4

★中学生の部

〔優秀賞〕

「葬られたる秘密」を読んで

東京都新宿区 茂路 菜然……………4

〔優良賞〕

「雪おんな」を読んで

東京都新宿区 小峰 果織子……………5

講評……………7

★高校生の部

〔優秀賞〕

八雲から学ぶ「常識」の落とし穴

東京都港区 高橋 美帆……………7

〔優良賞〕

小泉八雲の冷厳と心のぬくもり

東京都台東区 渡邊 杏咲……………9

〔佳作〕

本当の幸せとは何か
↳「春」に込められた思い

神奈川県川崎市 青木 望愛……………10

講評……………12

★一般の部

〔優秀賞〕

「雪女」のかなしみと集団

長野県松本市 巢山 和香……………12

〔優良賞〕

「雪女」を読み聞かせること

三重県四日市市 赤繁 容子……………14

〔佳作〕

絶対神無き赦し

大阪府高槻市 伊藤 道親……………15

『むじなアンソウン』

東京都板橋区 牧野 涼子……………17

ヘルン先生と行く旅

山梨県南都留郡 森 うずまさ……………19

講評……………20

第32回 詩 入賞者

〔優秀賞〕

八雲の伏し目

東京都目黒区 熊倉 省三……………21

〔優良賞〕

「八雲忌」

熊本県熊本市 鬼怒川 善子……………22

〔佳作〕

無敵のだんご

東京都文京区 遠藤 玲奈……………23

スピンをはさむと

愛知県名古屋市 吉田 豊……………24

その人のこと

岐阜県羽島郡 久夫……………24

講評……………25

感想文

小学生の部

〈優秀賞〉

八雲の心にひびいた琵琶の音

東京都武蔵野市 高橋 周

「小泉八雲の『雪女』は、隣の市で語りつがれていたんだね。」という両親の言葉がきっかけとなって、僕は小泉八雲に興味を持ちました。ちょうど、新宿歴史博物館で、小泉八雲の特別展が行われていたので、僕は八雲の作品を読んで、八雲はどのような気持ちで作品を書いたのだろうと思いつつながら展示を見ました。展示では八雲の書さいと高さが目を引く机の復元があり、代表作の一つである「耳なし芳一」はまさにこの高い机で書かれていたと思うと、八雲をととても身近に感じました。

「耳なし芳一」は、琵琶が上手な芳一が、その才能を亡者に見込まれてしまい、あの世に連れて行かれそうになったところを、体中にお経の文句を書いてもらったおかげで助かったというお話です。唯一お経を書き忘れた耳をもぎとられることになり、その書きぶりがとても怖くて心に残りましたが、それ以上に侍や琵琶が出て

くる日本のな話をなぜ外国人である八雲が興味を持って作品として書いたのが不思議でした。その解決のヒントは、特別展で見えました。八雲は、歌によって記憶がフラッシュバックした体験を元に、音楽によってあの世とこの世を交信する力があると信じていたのです。僕はこれを読んで、家族でよく行く神社の光景が目につきました。日本に昔からある神社では、鈴やかしわ手で神様に合図をすると聞いたことがあったからです。音によって、目に見えない神様の世界と心を通わせるといふ日本人の考えは、八雲にとって理解しやすいものであり、日本の風習や文化に深く共感しているのではないかと思いました。

八雲の怪談は日本の庶民の生活が舞台であり、日常生活の中に身近なものとしてゆうれいが出てきます。八雲は怪談を通じて、神様やゆうれいの住むあの世を、日常と身近なものとしてとらえている日本の文化や日本人の考えを、世界に広めたいと思ったのかもしれないと思いました。

八雲の特別展で、八雲の残した手紙や写真などから、八雲は日本の景色や文化だけではなく、そこに住む日本人の思いやりや親切な心も好きだったと思いました。僕も日本が大好きなので、将来日本の良さを世界に広めたいと思っています。そのために、日本中を旅して自分の目と耳で日本の良さを体験し、語学も勉強して、外国の言葉で日本の良さを伝えられるようになります。

〈優良賞〉

「伝える」ということ

島根県松江市 野津七海

私は怖い話が好きで、よく読んでいます。でも「怪談」はほとんど読んだことがなく、この本を読んだ後、「怪談」のおもしろさや怖さを知り、怪談にきょう味をひかれました。

私が一番心にのこったところは、芳一が鉄の指で耳をもぎとられるところです。「耳なし芳一」ってどういうことだろうと気になっていたのが解決したのと同時に、とてもびっくりしたからです。「口をきかずに、静かにすわっておるのじゃ。」とじゅうしょくに言われたことを守って耳をもぎとられてもがまんして声を出さなかった芳一。もし私ならいくらじゅうしょくの言ったことはいえ、すごい声を上げてしまうと思いました。

そして芳一は、耳がなくなってもびわをひき続け、平家の物語を語りついでいきます。だんのうら合戦の様子を伝えるときは、様々な音をたくみにびわで表しました。ふねがつきすすむ音、刀の音、海につきおとされる音……。同じびわの楽器でも一つ一つちがう表現ができるのはすごいと思いました。私は、ピアノを習っています。様々な音をピアノで表現することができません。だから楽器を使って伝えていく芳一のことをそんけいします。私も芳一のように、一つ一つのピアノの音にこだわって、これからひくようにした

いです。

芳一は目が見えないために、人の家に行っていると思っていたけれど、本当は、芳一がいるところはおほかだったり、さむらいに呼ばれていると思っていたけれどそれは亡者だったりしました。私は目が見えない経験をしたことがないので芳一の気持ちはわかりませんが、おしよさんの声を聞いて泣きだした芳一を見て、とてもつらかったと思いました。つらいことがあってもそれを乗り越えてびわをひきつづけ語りつづけている芳一は、本当にすごいと思います。

現代では、世界中の人々といろんな方法で話したり思いを伝え合ったり表現したりすることができます。テレビやユーチューブ、SNSなど、数多くの手だんがあります。しかし、そんな手だんのない時代に、目で伝えることのできない芳一が、口や楽器で、伝えていったのは、「伝えたい」という強い思いがあったからだと思います。

これまで、あたり前のように見たり聞いたりしていて、目や耳を使うこともいしきしたことがありませんでした。私は今、目が見えているので、相手の見えないSNSを使ったりするのはなく相手をきちんと見て話したり、直接会って相手と伝え合うということを大切にしていきたいと思います。

怪談の魅力

島根県松江市 岩井優奈

私は、小泉八雲の雪女を読みました。

学校で配られたおたよりにおうぼしてみなかったし、小泉八雲の怪談についてくわしく知れたからです。

茂作と巳之吉という二人の木こりが出てきます。そして、巳之吉の嫁のお雪は、昔、ふぶきの中で会い、茂作を殺した女だったという話です。

私は雪女を読んで、おそろしいと思いました。理由は、家族の中にあの雪女がいたし、それに気づいていなかったのもこわかったからです。雪女は、自分のことを人に話したら必ず分かるといっていたので、どうしてだろうと思っていました。でもまさか、家族になるとは思っていませんでした。それが私だったら、すごくこわいです。

そして、心に残ったことは、ふぶきの中で巳之吉を殺さなかったことです。若いから殺さないという理由だったけど、本当にそれだけなのか、他にもっと大きな理由があるのではないかと、ぎ間に思いました。

あと、最後に雪女のことをしゃべったのに殺さなかったことも心に残りました。なぜなら、殺すと約束していたのに、そうしなかったのは、子供のことを思っていたし、今は、巳之吉も家族だから、

殺せなかったのではないかと思いました。その代わりに、雪女は家族の前からすがたを消してしまったのではないかと思えます。でもそれは、巳之吉と子供にとって、悲しいことだし、私も悲しかったです。とてもおどろきました。

雪女は、家族のことを思いやり、大切にしていたので、人のような心を持っているのではないかと思い、不思議でした。

私は雪女を読んで、茂作を殺されてしまい、巳之吉が悲しんでいたところや、雪女が巳之吉を殺すと言っていたのに、そうしなかったことから、命が大切なんだと思いました。私も、人や動物や植物を大切にしたいと思いました。

そして、雪女は茂作を殺してしまっただけど、本当は、優しいのではないかと思いました。

私は今回、雪女を読んで、怪談についてのイメージが大きく変わりました。それは、こわいというイメージしかなかった怪談には、こわいだけでなく、登場人物一人一人の気持ちを考えると、悲しい気持ちになったり、楽しい気持ちになったり、優しい気持ちになったりと、たくさんの感情が出てきて、こわいだけではないということが分かりました。

小泉八雲の怪談の良さを知ることができて、前よりも興味を持つことができました。なので、これからもっと、小泉八雲の作品に出会いたいです。

講評

今年の応募作品は、昨年の二点を大幅に超えて二十七点だった。大変喜ばしく、今後も全国から多くの応募があることを願っている。

入賞作品はいずれもレベルが高く、優秀一点、優良二点とした。優秀作品は『雪女』と『耳なし芳一』を手がかりとして、八雲の描く「怪談」の世界を想像し、八雲自身について考察している点が秀逸だった。優良作品は『耳なし芳一』を「伝える」という視点から読んでいること、『雪女』の本心まで想像し読み取っている点が、それぞれ素晴らしかった。

受賞を逃した作品は、書く意欲はあるが粗筋の説明に終始したり、感想が表面的なものに留まっていたりして残念だった。次年度以降の奮起を期待したい。

(講評者 丹羽 隆)

中学生の部

〈優秀賞〉

「葬られたる秘密」を読んで

東京都新宿区 茂路 菜然

私はこの作文コンクールがきっかけで夏休みの機会に小泉八雲の作品に触れてみることにしました。

私にとって小泉八雲は怪談話を多く書いているようなイメージがあります。彼の有名な作品には「耳無芳一の話」や「雪女」などのお話があり、私は他にも「貉」や「夜光虫」などを読みました。読んだ中でも特に気に入った作品は「葬られたる秘密」という短編小説です。

このお話では丹波の国の金持ちの商人の娘のお園が自身の葬式の晩から、未練を抱えてお園の部屋の箆笥の前に無言で佇む幽霊となつて出てきます。そして人々は寺の住職に相談して彼女の未練を取り払ってもらうように頼んだのです。お園は京都で上品な芸事を修業して立派な教育を受けた、伶俐で美人な女性でした。その後は父の一族の知人の元へ嫁いで息子が誕生しますが、お園は結婚四年目にして病気によって亡くなってしまいました。そのお園の未練というのは彼女が幽霊となつて佇んでいる彼女の箆笥の一番下の引き出しの貼り紙の下に隠してあった、お園が京都で修業していたときに

もらった艶書、つまりラブレターでした。その恋文の内容を知っているのはお園と焼き棄てた寺の住職だけであり、まさにこの作品のタイトルである通り、秘密は葬られてしまったという結末です。手紙には一体どんな内容が書いてあったのでしょうか。

このお話でお園が京都で修業していたときの暮らしぶりなどの描写はほとんど描かれておりませんが、きっと彼女は京都で艶書の送り主である人と恋に落ちたのでしょう。ただしお園は身内の従者と一緒に京都へ来ており金持ちの商人の娘という身分であり周囲の人間が決めた男の人の元へ嫁がなくてはならないため、恋仲となった二人はお園の修業の合間を縫って周りの人々に気付かれないようにこっそりと愛を育んでいたのではないかと考えます。周りの人に知られてはいけない秘密の恋愛だなんてロマンチックに思います。同時に切なくさびしい気持ちがあふれます。もし自分がお園の立場にあつたら想い人と共に駆け落ちするでしょう。お園は自分の気持ちを秘めたまま亡くなりました。

しかし本文中に、四年間の結婚生活では「その男と楽しく暮した」という嫁ぎ先の夫との生活に特に不満はないような描写や、お園が幽霊になって息子の前に現れた際は「子供を見て微笑んだ」という息子を愛しているような描写があります。決してお園の四年間の生活が多く描かれているという訳ではないのですが、きっとその気持ちに嘘はないのでしょうか。ひと時の恋情を心の奥底に仕舞って嫁ぎ先で夫を支える妻として、一児の母として人生を歩む家庭を築いたお園はとても大人な女性であるといえるでしょう。

そんな彼女は、父の娘に質の良い教育を受けて欲しいという思いによって京都へ送り出されたように昔から周囲の人々に期待されていて、その期待に応えなくてはならないというプレッシャーを抱えていたからこそ、ひと時の恋心や縛りから解放されて純粋に楽しむことができたかけがえのない恋人と過ごした時間を忘れることはできず思い出の品であろう艶書を隠し持っていて亡くなった後でも周囲の人々に知られないよう幽霊となり現れたのではないかと思います。

本文中には私がここまで記した程詳細には書かれていません。お話の最後の方でお園が京都で修業していた時にもらった艶書が筆筒から発見されたことが記されているだけで送り主はどんな人なのか、京都でお園がどんな生活を送っていたのかなどは全く描写がありません。しかし短く簡潔な文章で構成された短編小説を深読みして考察をしてみることでより自分なりに作品を楽しむことができました。是非他の作品も深く味わって読んでみようと思います。

〈優良賞〉

「雪おんな」を読んで

東京都新宿区 小峰 果織子

この夏休み、私は久しぶりに「雪おんな」を読み返した。最後に読んだのは六年ほど前だったが当時の私にとってはかなり衝撃的な

内容だったためあらずじや読んでいる時の感情などを今でもはつきりと覚えている。「雪おんな」を初めて読んだ小学三年生の私はドキドキしながらページをめくり、雪おんなが茂作を殺すシーンでは雪おんなに嫌悪感を抱きながら「巳之吉を助けるのならもさくも助けてくれてもいいじゃん」と呟き、巳之吉が雪おんなとの約束を破り秘密を口にしてしまうシーンではびっくりして恐怖と悲しさを感じなんとも後味の悪く怖い作品だなあと思っていた。しかし、あれから六年が経ち改めて読み返してみると昔とは違う感情を持つことができた。やはり怪談特有のひんやり感は今も昔も大いに感じたが、それだけでなく昔恐怖と悲しさしか感じられなかったこの作品から愛や優しさ、運命の儚さを感じられた。

物語の冒頭は主人公が山で遭難し、茂作が殺され巳之吉は雪おんなを見てしまい…と、いわゆる怪談特有の奇妙で怖いストーリーが続く。冒頭で起こった出来事は巳之吉にとつて衝撃的で不思議でも辛い出来事だっただろう。しかし雪おんなにとつてこの出来事は人生の分岐点であった。これまで山で遭難者の命を奪ってきた雪おんなに、人間らしさが生まれたのである。気になるのは雪おんなは何か大きい権力に命令されていたため殺していたのか自分の意思でやっていたのか、という事だ。それは書かれていないので想像するしかないが、前者ならば義務を放棄する覚悟を、後者なら人間味のある感情を。どちらもかけがえないものを手に入れたと思う。物語は進み、巳之吉が雪おんなとの約束をやぶってしまうシーンでお雪はこう口にする。

「それは私じゃ、この私じゃ、お雪じゃ」

この台詞は私の中で最も印象に残っている。お雪は自分が皆に恐れられる妖怪「雪おんな」だった頃の自分を差別され、非難されるのが嫌。というのが伝わってきたからである。巳之吉と結婚して子供に恵まれ一見普通の幸せを手に入れたお雪だったが、あまりにも老けず美しさを保っているため街の人から陰口を言われていた。普通を望んでいたお雪は、自分は妖怪であるというコンプレックスや後悔、後ろめたさを感じていたのではないかと思う。だからこそ巳之吉が雪おんなの話始めた時、巳之吉が「お雪」ではなく「雪おんな」の自分をどう思っているのか、やはり自分を差別して考えているのか知りたくなってしまい「その話を聞かせて」と言ったのではないか。案の定「鬼魅の悪い」と表現した巳之吉にお雪はどんな感情を抱いただろうか。私が雪おんなだったら悲しい、悔しい、でも自分が悪いから。とそんな気持ちになったと思う。誰だって自分を「鬼魅の悪い」などネガティブな表現をされたら嫌な気分になるはずだ。にも関わらず巳之吉と子供を守り、自分を犠牲にした雪おんな。雪おんなは冒頭の遭難した人の命を奪っていた頃に比べると大きな成長をしたのではないか。私も雪おんなを見習って成長したい。

講評

中学生の応募は前回より増え、九点の応募であった。小泉八雲の作品を読み味わうことで、自分なりの視点に立って考えを深めていったというものが多かった。

優秀賞は、お園の京都での生活や艷書の送り主に想像を働かせることで作品をより深く味わうことができています。自分なりに作品を読み解き、想像を膨らませる楽しさを感じられる。

優良賞は、読み返す年齢やテキストによって印象や捉え方がかわるといい例である。巳之吉との出会いを雪女の人生の分岐点と捉え、雪女に芽生えた人間らしさ、コンプレックスをより深く読み味わうことができています。(講評者 石原 康博)

高校生の部

〈優秀賞〉

八雲から学ぶ「常識」の落とし穴

東京都港区 高橋 美帆

「美帆は、常識がないよね。」これはよく私が気の知れた友達から言われる言葉だ。

このように言われて快く思う人は、そう多くないと思う。私達の中で「常識がない」ということはマイナスイメージと強く結びついているからだ。

怪談話で名の知れる小泉八雲だが、数多くある彼の作品から、私は「常識(Common Sense)」というタイトルに興味を持った。

この話には、日々座禅と聖典に精通している博識な僧と、無学で信仰のない獵師が登場する。人里離れた山に住む僧のもとを、生活のための物資を送りに、獵師が訪ねたのだが、その日を境に、僧は神様が見えるようになる。けれども、その神様は狸が化けたものであり、そのことは狩猟によって分かったという話だ。

「常識がない」といわれることはマイナスイメージが強いけれども、八雲の「常識」を読むと、「常識がない」ことが必ずしも悪いことじゃないとわかる。

そもそも私が今回、八雲の「常識」を選んだ理由は、社会や国家の秩序維持に不可欠とされる「常識」を、明治時代に生きた当時の八雲は、風刺的に書き綴っているのか、それとも肯定的に賛美しているのか気になったからだ。

当時も今も止まない人種や宗教に起因する戦争や紛争から、差別やジェンダー問題まで、この地球のほとんどの問題は、各人の「常識」の差異から生まれていると思っている。そして、その「常識」の変化する姿こそが私には「妖怪」そのものにも見える。「常識」という「妖怪」の本質に迫ることで、地球上の多くの問題解決に寄与できるのではないかと思っている。

もつとも、八雲は「常識」に対して肯定的でも否定的でもない。加えて、現代の私達と少し「常識」の概念にずれがあるようにさえ思える。

八雲は、本文中で「博識で信仰深い」とプラス要素で語られている僧と、「無学で信心がない」とマイナス要素で語られている獵師が、それぞれ持ち合わせている「常識」が異なっていることを示した。そして、最終的にはマイナス要素で語られていた獵師の持つ「常識」によって、二人は直面した困難を免れたという話になっているのだ。

改めて「常識」とはなんなのだろうとスマホで検索してみると、『社会を構成する上で当たり前のものとなっている、社会的な価値観、知識、判断力のこと。また、客観的に見て当たり前と思われる行為、その他物事のこと。』と定義されている。

しかしながら、本文中では、僧と獵師は生活している環境や職業の違いから、それぞれの持つ「常識」も異なっている。常日頃動行に精進していて信仰心の強い僧は、神が存在することを「常識」としている。一方で、殺生を生業としている獵師は、たとえ神の姿をしようとして生き物の気配を感じた場合、躊躇なく矢を向けることを「常識」としているのだ。

一般的にはプラスイメージで書かれた僧の「常識」が正しかったという結末の方が、私達にとってしっくりくるのだと思う。それに関わらず、八雲が加えて、獵師の「常識」による選択を肯定的に書いたのは、権力のある立場の者が持つ「常識」に対して懐疑的な

視点を持ち合わせないことで、私達が誤った選択をすることを危惧しているからだと思つた。

私は今、高校で世界史と現代社会を学んでいるが、古くは、八雲の故郷でもあるデマゴグによるギリシア・アテネの衆愚政への移行や、独裁者ヒトラーによる第二次世界大戦の勃発など、現代においては、中国政府による弾圧や米国の分断など、多くのことに当てはまることがわかる。

「常識」とは必ずしも絶対的なものでない。そして自分が正しいと思いついていた「常識」を信仰するが故に盲目的になり、周りの助言を軽視してしまうことは危険だ、といったメッセージを私は八雲の「常識」から感じる事ができた。

必ずしも、「常識がない」といった言葉を受けて落胆する必要は無いのだ。

彼ら彼女らの言う、「常識がない」とは、その発言者達の考える「常識」がないということだけなのだから。多様な「常識」が存在する以上、他人から非「常識」だと思われることは必然でさえあるのかもしれない。

辞書にあるような「常識」の定義とは矛盾するこの事実を受け入れる努力が、今を生きる私達に必要なのだと思う。「常識」の表面的な差異が発端となって起こっている人種差別や宗教対立、いじめ問題等も、「妖怪」のような多様な「常識」を受け入れ、寛容になる姿勢を人々が疑いなく持つことが、本質的な問題解決の鍵となると信じてたい。

また、こうした問題解決だけでなく、多数派や権力の持つ人々の判断が、絶対ではないことも、八雲は私に教えてくれた。

「美帆は、常識がないよね。」と仲の良い友達に今度言われたら、少しまじめに八雲の話をしてみようかと思う。

〈優良賞〉

小泉八雲の冷厳と心のぬくもり

東京都台東区 渡 邊 杏 咲

小泉八雲はどんな時にもジャーナリストのまなざしを失いませんでした。日本が長くコレラに苦しめられ疲弊していた時であつても、小泉八雲は、法も警察も「残酷でなければならぬ」と断定します。日本人の感性に寄り添いながら文学作品を著す作家としてではなく、ジャーナリストとしての小泉八雲は、『日本の心』に収められた「コレラの流行期に」を通して、まさにいま再発見されなければなりません。

日本という異国においてコレラの蔓延に直面した小泉八雲は、当時の日本の衛生法にまで言及しながら、コレラ患者が次々と運ばれていく様子を淡々と記します。言うまでもなく、その災厄のまっただなかにある彼自身もまた、漠とした不安を肌身で感じていたにちがいないでしょう。それでもなお、コレラの猛威を冷厳にみつめる

小泉八雲のまなざしは、おびただしい数の人の死もありのままに捉えます。来日する前はアメリカの新聞社、そして来日後は「神戸クロニクル」で彼がジャーナリストとして活動していたことを私たちはあらためて思い起こすこととなります。

小泉八雲の「コレラの流行期に」は、はたして人間の命のはかなさを私たちに教えてくれるのでしょうか。すべてが無常であることを語っているのでしょうか。私は、むしろコレラとともにありながらも、いつも通りの堅実な暮らしを必死に営むひたむきさが小泉八雲によって称揚されているのだと確信しています。それは、いまコロナ禍にある私たちにとって、あたかも一条の導きの糸のようにも思われてきます。

まるで何事もなかったかのように、普段と同じ暮らしが昼も夜も続いて行く

「向いの瀬戸物屋の主人」のような小泉八雲にとって身近な無辜の人びともまた、コレラによって命を奪われました。しかし、どれだけコレラの脅威が深刻化しても、たくましく生き抜く当時の日本人のひたむきさが鮮やかに描かれています。太鼓の音、行人人たちの売り声、笛の音、飴売りの少年の恋の歌など、「コレラの流行期に」には聴覚的な描写がちりばめられています。コレラとともに生きる人びとの生活に小泉八雲は静かに耳を傾けます。

コレラは容赦なく子どもたちも襲います。それでも「子供達は遊

びを続ける」のです。そうした命のたくましさを八雲は「知恵」と呼びました。コレラの不安を受け容れながらも、なお一日一日を充実させるべきだと子どもたちは幼心に感知しているのです。コレラとともに生きる試練を、童心は生命力へと朗らかに転化させます。「コレラの流行期に」に描かれた子どもたちは、読者である私たちの現在のあり方について問いかけているのです。

しかし、コレラの流行期に「いつもどおり」に暮らしていくことは難しかったはずで、「石」というテーマにそのヒントを小泉八雲は象徴的に集約しています。いかなる玩具にも目もくれずに、なんの変哲もない石で子どもたちは遊びたがりです。すなわち、その不動の鉱物にさえ、子どもたちは新たな不思議を見出すことができるのです。

もし愚かな大人が、そんなものは何の価値もないつまらないものだよ、などと偽りを教えなければ、子どもは飽きることなく、石の中に常に何か新しいもの、変わったものを発見し続けるであろうに。

だからこそ、コレラの流行のさなかにあっても、小泉八雲は自宅から見えるいつもどおりの風景をジャーナリストのまなざしで見守り続けました。はるか遠くまで出向かなくても、身近な人びと、見慣れたはずのもの、そうした日常の一つひとつのなかに、いつも新たな発見や気づきがあるはずだと小泉八雲は教えてくれます。それらは私たちに見いだされる瞬間をずっと待っています。毎日の自宅

の食事の中にも、次の季節の訪れを感じることができのです。いかなる困難のなかでも、私たちは果てしなく続く日常のなかで泣いたり笑ったりします。いままも小泉八雲は、コレラの流行期と同じように、冷厳なまなざしで私たちの「いつもどおり」を温かく見守ってくれていると感じずにはいられません。

〈佳作〉

本当の幸せとは何か

「春」に込められた思い

神奈川県川崎市 青木望愛

正直に言おう。私はこの本を手取るまで小泉八雲という存在を日本人だと思っていた。古風な名前に日本をテーマとした作品の数々。一見でギリシア生まれのイギリス育ちで、純日本人ではないと気づくのは至難の技だ。しかしながら彼の作品を読むにつれて、成程と私は度々感じた。それは彼の文章に、純粹な日本人には描写し得ない「特殊性」を感じとれたからだと思う。

例えば『春』という物語を通して考えてみる。これは「春」という古風な躰で育てられた女性が夫の浮気により体調を崩し、絶命してしまうという物語だ。

作中にて彼女は家柄の良いお嬢様で、優雅な立ち振る舞いと素直な

心を兼ね揃えた女性と描かれて^{えが}いる。いわば日本の旧社会における「理想の女性」である。いついかなる時でも夫をたて、自分は影に徹する。それこそが良妻であるというのが日本の伝統的な考えだ。しかし、彼女はその性質故に芸者に惚れ込んだ夫に対して文句のひとつも言えずに気を病み、死に至る。単に物語として見れば悲劇の一言で済ませられるのだろう。だが、私はこの物語に込められた真意は別の所にあると思った。

「日本の女性よ、本当にそれでいいのか？」

この話を読んでいた時、小泉八雲のそんな言葉が聞こえた気がした。日本の女性の鑑である春が減びていく様を淡々と描いた物語。きつと外国人であるからこそ、日本人の長所も短所も客観的に捉えられるのだろう。もし純日本人が書いたのなら、この物語は「作り話」の域を出ることは無かったように思える。童話や怪談などをただの「作り話」で終わらせない。これこそが彼の、小泉八雲の作品の特殊性だ。彼が綴っていたのは作り話の皮を被った「日本人へのメッセージ」だったのではないだろうか。

「男性の影に隠れてばかりでは、いつか身を滅ぼす事になるぞ」春という一人の女性の悲惨な人生を通して、彼はそれを伝えたかったのではないだろうか。

現代の日本の女性は、当時と比べれば活動的になり、ある程度は社会進出を果たしている。だが、男性と同程度の権力を持っているかと言われたら答えは否。「男は仕事、女は家庭」や「男尊女卑」の考え方は、小泉八雲がこの世を去って百年以上経った今でも残っ

ている。男女間の格差を無くそうとする風潮を、この社会を、私は今まで他人事のようにほんやりとみていた。確かに男女間で平均年収などに差があるのはおかしいとは思う。でも別にずっと外の世界で働くわけじゃあるまい。そのうち家庭をもったら私はそこを中心に生きていくのだから、なんて少し諦めに似た感情を抱いていた。そんな私に彼は問いかける。

「本当に、それが貴女の幸せなのか？」

きつと私は、結婚して出産して専業主婦として生きていくんだろうなとずっと思っていた。だってそれが世間一般での「幸せ」だったから。「専業主婦になる事が一番安定した幸福」だと誰からか教わった訳でもないのにそう信じ込んでいた。

しかし、『春』を読んだ事で私は気づいた。今、私が見ているのはすりガラス越しの世界だということに。歪んだ女性への理想像と常識は、本当の「幸福」を曖昧にしている。専業主婦になる事はきつと一種の「幸福」である事は間違いない。だけれどもそれが私にとって本当の「幸福」なのかは分からない。きつと本物の幸せは、鳶のように絡む「女性」への固定観念が解けた時に見えてくるのだと思う。小泉八雲の作品は鳶の中にいる私に一筋の光をもたらしてくれた。

「本当に、それが貴女の幸せなのか？」

彼のあの問いかけに今の私ならこう言うだろう。

「まだ分からない、だから見つけ出そうと思う。女性としてじゃなくて『私自身』の本当の幸せを」

私の人生にまた一つ新しい色が加わった。

講評

応募総数が過去最高となった今年は読み応えのあるレベルの高い感想文が集まりました。新型コロナウイルスの蔓延で休校、巣ごもり、部活の自粛など不慣れた生活を強いられる中で八雲の本と向きあってくれた高校生たち。八雲や登場人物の孤独や心の動きに注目する感想が多かったのが特徴でした。きっと高校生たちの青春と重なるのでしょうか。

優秀賞の「八雲から学ぶ常識の落とし穴」は哲学的な思考に感じました。文章の外にある部分まで深く読み込んでいた点を特に高く評価します。最初から最後まで飽きさせない筆力も見事です。

優良賞の「小泉八雲 冷厳とぬくもり」と佳作「本当の幸せとは何か『春』に込められた思い」は僅差でした。八雲の作品から「冷徹とぬくもり」が新型コロナウイルスなら「本当の幸せ」はジェンダーを扱うという時事ネタの勝負。分析の明晰さで「冷徹とぬくもり」が少しだけ優れていました。（講評者 高嶋 敏展）

一般の部

〈優秀賞〉

「雪女」のかなしみと集団

長野県松本市 巢山和香

祖父母の暮らしていた村は、雪がはるかうずたかくまで積もる場所、私は年末年始に祖父母の家へ行くのが楽しみだった。何も無い閑散としたその場所は、冬はスキーに行くのが恒例だったからだ。私にとって雪はお伽話のひとつだった。あの鼠色に覆われた空から真っ白な雪片がとめどなく降りてくる様。ピアノの部屋、薄ぐらい中で窓のむこうがいやに明るい。外の、色彩を欠いた影のような松と電信柱、私はまばたきも忘れて見入っている。凍てつく寒さが、灯油ストーブのにおいと振動でうすれていく。大人になった私は、雪を少しうとましいと思う。電車が乱れること、足をとられること、じっと冷気がまとわりつくこと。あの祖父母の家で過ごした冬を思い返すと夢ではなかったかと思う。雪の魔法は何もゲレンデばかりではないのかもしれない。

雪女の登場は鮮やかだ。凍るような寒さの中で美女を見た巳之吉は、死の瀬戸際とも思わずにただ美しいと思う。冷たく、恐ろしく、美しい邂逅で、一瞬夢かとも思う場面だ。彼女は二度、巳之吉を見逃す。一度目はこの時、そしてもう一度は、最後かき消え

る時。

最初の雪女は非常に恐ろしいが、これは行動原理が不明であることに起因している。命が雪女の心持ちだけにかかっているこの時、雪女は美しく無慈悲であり、まさに雪女だ。それに対して、彼女の最後の言葉には、身を切るような切なさがたただよう。お雪の、恐ろしいというよりも悲痛なためいき。読者は別離だと悟る。彼女のほかなさは読後まで尾を引く。

お雪はなぜ消えなければならなかったのか。巳之吉が約束を破ったからである。しかし彼女は、彼女自身の言葉はとうとう遂げないまま消える。だとするならば、巳之吉の話聞かなかったことにもできそうなものだ。しかし彼女は消えてしまった、大事な子供を残して。

私はここで、雪女の自意識について考えた。演じることと偽ることについて。これは一見同じように思えるが、実は全く違うのではないかと考えた。例えば俳優が台本の通りに役を演じる。例えば私が、母の前では娘を、夫の前で妻を、兄弟の前で妹を演じる。親友を、後輩を、上司を「演じる」。私たちは誰もが、状況や役割に応じた「私」を操っていると思う。そのように振る舞っている間に、自分を偽っていると感じることもなければ、没頭していて我を省みることもない。まさにこれこそが「私」だと信じている。対して「偽る」ことは、「隠す」ことであり「欺く」こともある。

雪女は巳之吉を気に入った。戯れで命を見逃した。その後お雪と名乗って再登場し、巳之吉と家族になった。しかし、巳之吉が雪女

の話をしたことで、彼女は、自分自身がまぎれもなく雪女であることにつきつけられたのではないだろうか。ここで彼女がとどまることは、お雪という名前の、江戸へ行く人間ではなく、人の命を戯れで吹き飛ばす雪女であると、自覚していながら、それをひた隠しにすることを意味する。それは自分自身を偽り続けることであり、周囲に自分を隠し続けることであり、最愛の家族を欺き続けることであり、どれほどの苦難だろう、と想像する。

自分から逃げつづけることはできないと、彼女は知っていたのかもしれない。子供たちを残して消えたお雪を、私は無責任だとは思わない。雪女としての自分を眠らせて手に入れた安らぎの場所を去らなければならなかったかなしみばかりが胸に残って離れない。お雪が巳之吉と過ごした日々や、消えるいまわの感情は、雪女であっては知るはずもなかったことだと思う。

さて、この話は、自我とは別に、異質とは何か、という点にも注目できると考える。お雪はたしかに人間味があっただろう。巳之吉の母が気に入ったように、村の人々にも受け入れられて暮らしたのだろう。けれど村の人々の思いをつづった一説もまた、あるのだ。「田舎の人々はお雪を、生れつき自分等と違った不思議な人と考えた。」

雪女がお雪として暮らした日々を、私は筆者自身とも重ねて、想像してしまう。小泉八雲が抱いていただろう、母への憧憬を。我が身の生涯を一心不乱に走りつづけただろう新聞記者時代を。転々とした中でたどり着いた日本、その片田舎での暮らしは、穏やかで

安らぎに満ちたものだったのだろうか。我が身を活かすに不足無しとお思いになってくれただろうか、幸せのうちに生涯を閉じたことを願ってやまない。

異質な何かが集団にまぎれこむとき、それは渦中のものばかりでなく、受け入れる方の懐の深さや素地もまた、試されていると考える。今暮らしは、限りなくボーダーレスになっている。キャリアやライフスタイルの選択肢も豊かになった。その一方で、仲間外れを嫌う心理は苛烈さを増し、同調圧力という言葉にも耳慣れた。これからの生活を守るのは、「一人」であり「みんな」であるということとを忘れない。

〈優良賞〉

『雪女』を読み聞かせること

三重県四日市市 赤 繁 容 子

「ひとことでもしゃべれば命をとると、たしかに言っておいた。じゃがの……」

何度読んでも、一番緊張する瞬間である。お雪の怒りが、切ない慈しみに変わるのを、小学生にどう読み聞かせれば伝わるのか。

小学校で読み聞かせボランティアを始めたのは、十年ほど前、息子が一年生に上がった年だった。初めは何を読んでも喜んでくれ

る低学年を回っていたが、慣れてくると、高学年にも行くようになった。

五、六年生にもなると、絵本への反応は薄い。クラスによっては、おしゃべりが最後まで止まない。図書館の司書にすすめてもらった本や、低学年で人気だった本を持って行ったが、なかなか受け入れてもらえない。

そんなある日、図書館で出合ったのが『雪女』である。絵の透き通るような美しさに惹かれて手に取り、十分後、絵本コーナーの片隅で、私はほろほろ泣きながら本を閉じた。

切ない、切ない。子どもの頃、何度か読んだはずの物語は、初めて触れるように大人の私をこんなにも切なくさせる。小泉八雲の怪談。怪談って、怖い話のことだよな？ あれ、なんで私、こんなに胸を揺さぶられてるんだろう？ 再度本を開きながら、思いを馳せてみる。

日本の話なのに、異国の香りのする文章は、八雲が採話し、吟味して思いを乗せた言葉たちを、平井呈一が丁寧に日本語に落とし込んだのだろう。何より、日本民話ならばよくある、助けたから恩返し、という構図ではなく、異形の者の純粹な悲恋の物語であることが、私の胸を打った。

この切ない気持ちをも、十、十一歳の子がわかるのだろうか？ という疑問もかすかにあった。が、それより、八雲が編んだこの美しい物語を伝えたい気持ちが勝った。

何度か練習を重ね、冬のある朝、いよいよ五年生の教室で、私の

『雪女』が始まった。

「茂作は固くなって死んでいたのです。」

ちらつと顔を上げると、先ほどまでだらつとしていた子どもたちの顔が、しゅつと引き締まっている。

「この見ず知らずの娘に、なんとなく心引かれてきました。」

茶化そうと口を開いた男の子に、隣の子が

「しっ。」

と、口に指を当てて目配せする。空気を察した男の子は、きゅつと口を引き結んだ。いつの間にか、どの子ども『雪女』の世界に引き込まれている。

あたたかい家族の場面は、やがて来る巴之吉の悪意のない裏切りを、より過酷なものに落とし込む。そしていよいよあの場面。

「せめて子どもを大切に、だいじに育ててくださいな。」

感情が出過ぎないように細心の注意をしながら、言葉のひとつひとつに思いを込めて読んでいく。最後のページを閉じ、氷の結晶きらめく裏表紙を見せながら、教室を見渡した。

誰もしゃべらない。ただまっすぐ、結晶を見つめている。子どもたちが巴之吉と雪女の悲しみ、苦しみと心一つにしているように感じた瞬間だった。

担任の先生が、教室の外まで追いかけてきて、お礼の言葉を述べて下さった。目が赤くなっている。本と出合った日の私と同じ思いだったのだろう。『雪女』は、子どもには子どもの、大人には大人の、心揺さぶられる刃のような思いをはっきりと刻みつけるのだ。

それからほぼ毎年、私は五年生に『雪女』を読み聞かせに行く。

行く前の時間も、八雲と再会する貴重な時間である。八雲の伝記や他の怪談を読み返したり、武蔵の国を確認したり、テレビのインタビュー番組で、絵本の製作秘話を聞いたりする。

読み方も、少しずつ変えてきた。初めは声の高さを変えたり、緩急をつけたりしていたが、最近では語り口を人物ごとに変える程度にして淡々と読んでみたりもする。どれが正解かなど私にはわからない。ただ、目の前にいるその年の五年生に向けて、思いを込めて読み聞かせる。この美しい物語を十、十一歳の心で受け止めてほしい。そして大人になったとき、大人の心で再会してほしい。小泉八雲の『雪女』は、何度出合っても、その時の自分に向けて、新たな思いを刻みつけてくれるのだから。

〈佳作〉

絶対神無き赦し

大阪府高槻市 伊藤道親

初めて「停車場にて」を読んだのは、「KOKORO」に収録されている英語の原文だった。

当時の私は四十代で初めて海外駐在の辞令を受けてオーストラリアのブリスベンにいた。その時、古本屋で手に取ったのが「KOK

ORO」だった。外国人から見た日本のことも少し理解しておこうかな、という動機で購入したのだった。

小泉八雲は日本の怪談を海外に紹介した人、という程度の認識だったのだが、この本の冒頭にあった、「AT RAILWAY STATION」邦題「停車場にて」にはとても驚いた。

話はとても短い。巡査を殺して逃げた窃盗犯が遂に捕まり、熊本のとある駅に護送されてくる。そこで巡査の妻と幼い子に対面し謝罪し赦しを請う、というものののだが、犯人、刑事、遺族そして群衆の描写が素晴らしく、まるでその場に居合わせたような感動があった。

しかし、この話のどこが「日本」らしいのか？ という疑問が頭から離れなかった。心を動かされる話だとは分かってても、このどこがユニークなのか、よく分からない。本文では、子供への愛情が日本らしいとして、石川五右衛門が盗みに入った家で子供と遊んでしまい目的を果たせなかった話が紹介されているが、子供がかわいいのは世界共通ではないのか。

その後もときおり読み返すうちに、これは、西洋と日本のもっとも深い文化的、宗教的な違いが背景にあると思うようになった。

自身の宗教歴を紹介すると、まず両親の影響でキリスト教プロテスタントに入信し洗礼を受けた。社会人になってからは、仏教の禅宗に転宗し、在家修行者として戒名を授かり坐禅会にはもう二十年近く通っている。このような背景から私が両方の宗教観を比較することも許していただけに幸いだ。

まずキリスト教で最も大事なものは、罪の赦しだ。絶対者であり創造主である神の前に罪深い人間が救われるために、神はイエスを遣わしたのだった。人間はイエスを通じてのみ神に立ち返り救われる。特にプロテスタントでは教会の仲介も無く、人間は神と一対一で対峙することとなる。

一方、仏教とは人間がこの世を正しく把握し（悟り）、悩みから逃れようとする営みだ。それに加えて日本に伝わった大乘仏教の伝統では、自分の功德を他人にも差し向けて自他ともに悟りを得ようとする回向の思想がある。

繰り返すと、キリスト教では、人は絶対者である神に対して罪を認めて悔い改め、救いに与かり救われる。仏教では本人の気づきが重要で、正しい生き方に目覚めて仏になるのであり、絶対者はいない。

「停車場にて」ではもちろん絶対者はいない。なんなら裁判もまだ、判決もまだ下されていない。しかし八雲は、
“Here was justice unswerving yet compassionate”

（ここに揺ぎなくも温情ある正義があった）と深く感じ入っている。

この場では、様々な登場人物がそれぞれの持ち場で役割を果たし、一人の罪人の改心をもたらしした。またそれにとどまらず、その罪人の改心も周囲の人々の心を動かしたのだった。

殺された同僚を四年間思い続け遂に捕えた刑事、気丈に犯人に対峙する妻と幼い息子、そして悔恨の情に死刑を覚悟しながら、跪い

て赦しを請う犯人。そして駅に集まった熊本の民衆。

私は特に最後の民衆が一番の主人公なのではないかと思う。「怒り出すと日本で最も危険な庶民」と描写された人々が、一言も発せず、静かに見守っていた。ここに八雲は、彼らが、正義、遺族感情、犯人の人間的弱さ、といった諸々を全て受け止め、同情し、共感したと感じたのだ。

絶対者がいない国で、刑事、遺族、犯人といった当事者に加え野次馬さえも、それぞれの倫理観を認めて共感を紡ぎあっている。絶対的な神のいない国にも正義や赦しがある。それが、八雲がここで記しておきたかったことではないだろうか。そういう事例が確かに極東の一角にあったのだということを残しておきたかったのではないだろうか。

その場の全員が互いに回向の力を及ぼしあっている、それは確かに日本に根付いた仏教の伝統であると思うのだ。

八雲の本名は、パトリック・ラフカディオ・ハーン。アイルランドの守護聖人に因むパトリックはあまり使わなかったようだ。そこに彼のキリスト教に対する懐疑があったのかもしれない。彼の異文化を理解する独自の視点はそういうところからも培われたのではないだろうか。

『むじなアンノウン』

東京都板橋区 牧野涼子

怪談『むじな』における恐怖の要点あるいはクライマックスは、ラスト、助けを求めて駆け込んだ先にもつぱらぼう……同じ穴のむじながいたところにあるのは、誰の目にも疑う余地のないことだろう。

この様相を、人間の持つ根源的な恐怖心に照らし合わせて、端的に申すなら、それは間違いなく、少数派に帰属することの恐怖であり怖気である。

裏を返せば、ひょいと入った見世物小屋でもって、たとえおぞましいろくろ首女がいたところで、それはあくまでも単独であって、薄暗がりの中、周囲の見物客が普通の人間たちの集まりである以上、恐怖の類はどこまでも享楽の範囲にとどまるのである。

これももし仮に周囲の見物客までもが、同類のろくろ首人間と言う異形であったなら、たちまちのうちに少数派としての恐怖におのき、わつと声を上げて小屋から一目散に退散するに違いない。

同様のことを別の形で言い表すなら——映画でおなじみのゾンビを取り上げるのが好都合だろう。ゾンビ・シリーズほど、少数派の恐怖を体現しているものはないからである。

簡単な話、ゾンビに対する恐怖など、いつそのこと自らがゾンビになってしまえば、いっぺんに消散することとあいなる。

逆に言えば、ゾンビに抵抗する人類と言う生物であるかぎり、ゾンビに対する絶大なる恐怖は、かたときも無くなることはない。

また、だからこそ、ゾンビ映画に登場する人間たちは常に団結し、奇跡的なまでに力を合わせて共闘するのである。

このことは、究極的に個人の闘いに終始することとなる『エイリアン』等の映画との対比でも明らかだろう。

考えてみれば、この恐怖のかたちは古代から脈々と続いており、むしろ現代社会においては、かつて以上に顕在化している気がする。

最も典型的なのが、いまのアメリカで拡散しているQアノンなど陰謀論者の集団である。

平たく言えば、この世界は同じ穴のむじなによる利益集団（ディープ・ステート）が牛耳っているのだと思っており、そのうち自分たちは奴隷の地位に墮とされるマイノリティーであると信じて疑わないグループのこと。

だからこそ、彼らは個々で自由きままに反発するのではなく、強固な群れとなって一致団結して共に闘うことを旨とする。

そうやって、自分たちのことを実はマイノリティーであると自覚すればするほど、結束がたかまるゆえ、9・11の頃以上に明らかに白人の人口が減少しつつある現代のアメリカ国内で、かつてないまでに陰謀論が吹き荒れているのは当然のことと言えよう。

この不穏な現象を、もう一度怪談『むじな』にたちかえて当てはめてみると、こんな風なことではないだろうか――。

それまでのアメリカなら、「てえへんだ、てえへんだ、マスター、なんてこった、俺、スゲエ恐ろしいモンスター見ちゃったよ」と白人の若い男が助けを求めて、バブに駆け込んで来ると、当然同じ白人の初老のマスターがいつものように出迎えてくれる。

「グレッジ、おめえ、相当酔っぱらっちゃまってるようだな。それとも粗悪なドラッグでもやってハイになってんじゃねーのか!」

「そうかもしれねーな。やっぱ俺の見まぢがいか。わかっただよ、おやっさん、今夜は早く帰って、大人しく寝ることにするよ……」

こういった顛末は70年代前後、頻繁にUFOを目撃していた頃のやりとりによく見られたし、それが殊更集団化して一致団結の上、UFO狩りに発展することにはならなかった。

ところが、現代のアメリカ社会は怪談『むじな』の世界そのものであり、駆け込んだ先も当然敵の巣窟に他ならず、次に駆け込んだ先も同様とあつては、マイノリティーたる恐怖を心底覚え、この世はむじなに支配されている!とばかりに、信仰的に陰謀論にのめり込んでいくこととなるのである。

ただし『むじな』の主人公が幻想を見ていた、あるいは見させられていたことを真っ向から否定しきれないように、結局すべては本人の心の有り様に委ねられているところに、物語同様、現代のアメリカ社会が抱え持つ危うさがあるのではないだろうか。

そうしてこのように、少数派としての恐怖、即ち島国日本にはあまり見受けられない、きわめて西洋的な恐怖（我が国にあるのは少数ではなく、孤立そのものの恐怖である）を描いた小泉八雲は、そ

の意味において、どこまでもラフカディオ・ハーンその人であった。

そう考えるなら、怪談『耳なし芳一』は、物語の前半亡霊たちの中で、孤立する恐怖にさらされているものの、後半この世の有象無象の亡霊やものけに対峙する、仏教徒と言う少数派の恐怖へと転じている点で、まさに和洋折衷の怪談であり、だからこそいまお名作とされているのではないだろうか。

ヘルン先生と行く旅

山梨県南都留郡 森うずまき

海外旅行の気分になろうと選んだ「仏領西インドの二年間」。昔見たドラマ「日本の面影」の影響で、ヘルン先生こと小泉八雲の後半生はだいたい知っている。しかし来日前のヘルン先生については何も知らない。我が無知を補うためにも良い機会と思った。

本を開くなり出港の場面だ。私はヘルン先生の弟子になったつもりで、その背を追いかけていく。あるいは紀行番組を撮影するカメラクルーのように、周囲の映像と併せてナビゲーター・ヘルン先生の表情を捕らえるつもりで読み進む。しかし程なく、読者はそんな芝居じみた役割を担う必要などないと気が付く。ヘルン先生その人こそ、高性能のカメラであり、どんな微細な音声も拾うマイクであり、空気検知器ですらある。我々読者はただの透明人間になりヘルン先

生の首の後ろにくつついて、赤児のように無心で先生の五感(あるいは六感)が反応したものを共有し、感じていればそれで良いのだ。

私は無色透明な空気と化して、ヘルン先生の異郷の航海を存分に楽しんだ。かつてこれ程描写の細かい紀行文に接したことがない。想像力を喚起しようと努力する必要もない位、文字を追うだけで次々と脳内に映像が浮かぶ。比喻の巧みさゆえか。訳者も名手なのだろう。海の色、山の色、島人の肌の色や衣服の風合い。それらを表す比喻が実に詩的だ。難しいことは何もない。ヘルン先生は私の感受性のスイッチを一つ一つの確に押しつけて、自室でくつろぎつつ高画質の動画を眺めるのと遜色ない、リモートの旅を味わわせてくれる。

小さな島々を巡り、やがて落ち着いたマルティニーク島。小品集の世界だ。私はお気楽透明人間のまま。しかしこの島のあれこれに興味津津なヘルン先生は、もはや鋭敏な感性の持ち主を通り越して一種の偏執狂ではないかと思うほど、そのアンテナに引つ掛かった物事を重箱の隅をつつくように追求せずにはられない、大変な人だということに気付いてしまった。未知の事象に対する飽くなき好奇心の権化。なるほどこれは、当然日本文化にもどっぷり夢中におなりなわけですわ…。

とりわけ島民女性に「ゾンビ」の恐ろしい言い伝えを話してくれろとせがみ、その内容を詳細に書き記している箇所など、ドラマで壇ふみ演じる妻セツさんの怪談話に身を乗り出して聞き入るヘルン先生の姿が重なり、すでに西インド諸島時代には小泉八雲誕生の素

地は十分培われていたのだと納得する。

それにしても、令和の日本から東の間の逃避行をもくろんでこの随筆集を読み始めたのに、ヘルン先生の筆によるカメラワークはあまりに精度が高過ぎて、島の俗語や小話を追っているうちにいつしか島のドロドロした歴史的内情に分け入り、しまいには内視鏡まで持ち出し内臓の裏の突起物や腫瘍まで探るかのようになり、物見遊山の者は知らなくていいような現実までえぐり出すものだから、マルティニークは夢の島などでは決してなく、「今ここ」の私が生きる現代に否応なく連結させられてしまう。

一八八七年の「天然痘」の章はまさしく当代のコロナ禍そっくりで、「島へおいでなすった（中略）顔なじみのない、おっかないお客さん」とヘルン先生ならではのウイルスの形容はユーモラスだけでなく、ダイヤモンド・プリンセス号が横浜港に現れた頃の日本と、その後の新型ウイルスの蔓延ぶりそのままの展開は、一体二十一世紀の人類は天然痘の時代から何を学んできたのかと疑わしくなる位だ。さらに疫病による死者の多さに墓地が満員となり、死体は二つずつ一緒に埋葬されるという件など、直近に報道されたどこかの国のレポートであっても不思議はなく、よりによって二〇二〇年の今この本を手にしたのは何の因縁だろうかと空恐ろしさすら感じる。

マルティニーク島にはペレー山という火山もある。その風景を語るにヘルン先生は北斎の富嶽百景を引き合いに出している。私の住まいがまさに富士山北麓、浮世絵の赤富士をリアルに望める至近の地域なので、ペレー山の噴火の話から嫌でも富士山を連想してしま

う。東海地震は私が小学生の頃からいつか来ると言われ続け狼少年状態だし、南海トラフでも富士山が刺激されて火を噴くかもと予想されている。考えるなど言われても無理だ。

結局、現実がどこに逃げてもついてくる。ヘルン先生と仮想的に旅情を共有する試みを通じてよくわかった。ヘルン先生は徹底した現実主義の人だ。検証の人なのだ。そして西インド諸島でも、日本でも、世界中のどこにしようとも、無限の好奇心に裏打ちされたヘルン先生の未知のものへの姿勢はきつと不変なのだ。

講評

今回集まった感想文は例年に増して「雪女」を題材にした方が多く、優秀賞、優良賞ともに「雪女」であった。審査員間で「なぜだろう」「コロナ禍と関係あるだろうか」と話題になった。

優秀賞の作品は雪女をさまざまな角度から語って印象深い。自分自身を隠し続け、最愛の家族を欺き続けることがどれほどの苦難だろうと想像し、子供たちを残して消えた雪女を無責任だとは思わない。雪女の異質性から仲間外れを嫌う心理や同調圧力に言及する点はやはりコロナの影響があったのだろうかとも感じた。優良賞は小学5年生に雪女の読み聞かせをされた方の作品。悲恋の切なさに子供たちが心揺さぶれるそうで、まさに「小泉八雲をよむ」というこの公募にふさわしいと思った。

（講評者 岩崎 誠）

詩

〈優秀賞〉

八雲の伏し目

東京都目黒区 熊倉省三

八雲は目をそらしている

小泉八雲記念館の壁にかかった八雲の写真は
伏した目のものが多く

瞳を半ばまぶたで覆い

ほとんど目を閉じたものもある

八雲は何を見たくなかったのか

からからと下駄の音が暫時高く響いてくる

松江大橋の上で鳴る下駄の音が忘れられない

八雲はここではじめて「日本」を聞いた

本名ラフカディオ・ハーン

四十歳の秋のこと

結ばれた旧松江藩士の娘小泉セツは

八雲に外国からなぜ松江に来たのかと問うた
八雲は仰ぎ「八雲たつ」をみるようにこたえた

出雲が古い国で

神代の面影が残っているからと

セツはこれに不満で

松江は綺麗な街で

旅人は松江に入るとみな

眼のさめるように驚いたと

子どものように松江を自慢する

八雲はあたたかい丁子色に包まれた屋敷で

浴衣を着て静かに蟬の鳴き声を聞くのを

たのしみにした

教師の八雲は学校から帰ると直ぐ和服に着替え

座布団に座って煙管を吸い

食事は毎日日本料理で箸をたくみに操った

白足袋が着物の裾から見え隠れするのを好んだ

活発な婦人より淑やか婦人

目なども西洋人のように上向きではなく

下向きにを好み

観音様や地藏様の

謙虚でやさしい目が好きだった

八雲は宍道湖に映える夕日が
夢の光のように静かだと見入る
紫色の夕靄がしだいに淡い朱となり
金になって上の方へと煙のように色あせてゆく

日本にこんな美しい心ある
なぜ西洋の真似する
八雲は目を伏せるように
西洋風を嫌い遠ざけ賤しんだ

八雲が松江を去る日
その伏し目がちな目に
手を振る二百人あまりの教え子の顔が映った

〈優良賞〉

「八雲忌」

熊本県熊本市 鬼怒川 善子

この国では
わたしの 天に還った日を
弔うという

わたしはレフカダから
ダブリンへ放り出され
北アメリカ大陸を放浪し

やっと思つけた愛にさえ
嫌気が差してしまったというのに
そこから立ち退くように 逃亡するように
この国へ流れ着いたというのに

わたしにとって この国は
どこまで行っても
決してたどり着くことのできない
あの優しく微笑む母の心のように

いつの間にか
わたしの胸をかきむしり続ける
母への強烈な恋慕が
この国の穏やかな神秘性への
憧れに変わっていった

そう気づいた頃には
もう わたしは
この国の文化に
完全に身をゆだね もみこまれていた

この国には
大和ことばという美が存在している
加えて我が祖国の言語を学ぼうという
絶えることのない
未知の存在への恐れる音も立てない
この国の人々に救われた
わたし

この国の人々は
なんと深遠な愛情に満ちた心を
持って生まれてくるのだろう

この国で愛の真実を知った
そのひとのこどもを
天から授かった
そのひとは まるで
わたしを赤児のように
そっと静かに
そっと撫で
そっと 激しく 愛してくれた

ああ 日本の国よ
何も持たなかった流れ者のわたしに
あなたがたはいまも愛を注いでくれる

私を弔うあなたがたのまぶしい光と熱が
失った母が住む
わたしの哀しみの心の闇を
朗らかに照らし続けてくれているのです

〈佳作〉

無敵のだんご

東京都文京区 遠藤玲奈

穴に落ちても
別の世界に着いても
動じぬおばあさん
鬼がいると言われても
先へ向かうは
だんごのため
だんごを
だんごを
探さねば
だんごを

だんごを
作らねば

おばあさんの

生きがい

アイデンティティたる

だんご

今日もどこかで

まるまるふくらむ

おばあさんの

宇宙

スピンをはさむと

愛知県名古屋市長 吉田 豊

物語の途中にスピン（葉紐）をはさみ

目を空にむけると

革靴を提げたあなたの後ろ姿が

ぼんやりと見えてくる

長い航海の後に

たどり着いた日本の

風景や生活に流れていたスピリット（精神）を
英単語のなかにすべり込ませた

英訳された物語が

もう一度和訳された本のなかで

おゆきの、芳一の、お園さんの人生が

私の思考のスピン（葉紐）になる

何を信じ 何を恐れ 何を讃えたのか

はさみこまれた時代の葉で

近代文明との交差点に立つ祖先の拠り所を

あなたは教えてくれている

その人のこと

岐阜県羽島郡 久 夫

あわあわとした街に

あわあわとした人が降り立ち

あわあわとした物語を綴った

その人はこの国のさまざまなもの

話をする事ができた

木にも草にも

川にも海にも
雨にも雪にも

そして目には見えないものとも

この世界には

心でしかとらえられないものがたくさんある
とその人は教えてくれた

ふるさとと同じものを

この異国で見る

異国にいてふるさとにいた

その人の語るものは

どこかせつない さみしい

そして やさしい

まるで この土地のように

この土地はその人を育み

豊かにした

街のどこかにその人はいつもいる

そして、街や人や城をやさしく見ている

講評

応募作五十二篇のそれぞれが八雲の魅力に浸りながら、詩の中でさらに展開させている。題名にも工夫が見られ、深まりを感じた。

優秀賞「八雲の伏し目」は、記念館の写真の「伏し目」に着目し、「何を見たくなかったのか」と問う。それは八雲が何を見たかったのかに連なる。出雲に残る「神代の面影」に向けたまなざしは、「観音様や地藏様の／謙虚でやさしい目」と重なって、慎重深い彼の姿とともに松江の人々に映るのだった。

優良賞「八雲忌」は、死の世界から見た八雲のモノローグであろう。「流れ者」の意識は母への恋慕を際立たせ、やがて辿り着いた妻セツの「愛の真実」によって昇華された。八雲を弔う人々の心が、今も「哀しみの心の闇を／朗らかに照らし続け」る。灯のような救済が描かれている。

(講評者 川辺 真・升田 尚世)

【審査員】石原 康博 岩崎 誠 内田 融

川辺 真 小林久美子 高嶋 敏展

丹羽 隆 升田 尚世 (五十音順)

表紙写真

松江時代の小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)
1891(明治24)年 小泉家蔵

令和2年度

**「小泉八雲をよむ」
感想文・詩 入賞作品集**

令和3年3月

編集・発行 松江市
松江市教育委員会
八雲会